

税金と生きる

藤女子中学校3年 前田 海音

二〇六九九〇円。一泊二日の入院費だ。私は指定難病のため定期的に通院、入院している。その際には特定医療費受給者証という手帳を提出し、医療費負担の軽減を受けることができる。結果、今回の患者負担は三万三千二百円。おそらく私は生涯に渡り治療が必要なため、経済的負担が軽減される制度の充実は死活問題である。父母は「医療を不安なく受けられる社会制度はありがたいね。」と言う。私は日本の医療に感謝しつつ、同時にこのシステムが継続しうるものなのか不安も感じる。

平等に医療を受けることができる日本の国民皆保険システムは世界最高レベルである。その運用に欠かせないのが税だ。国民医療費の財源負担の内訳を見ると約四割を税により負担していることがわかる。日本の政府支出に占める医療費の割合はOECD加盟国中で最も高いことが指摘されている。病の克服は人類共通の願いであるが、財政面では手放しに喜べない。国民医療費はこの約二十年で一・五倍に増えており、税で足りない部分は公債で手当されている。公債の返済は将来世代の税収が充てられるため、負担が先送りされる。財源問題を先送りすることは政治的には可能かも知れないが、経済的には合理的な選択ではないだろう。そのため国民医療が継続するためには、保障における負担と給付のバランスについて不断の検討が重要であるし、何より国民自らが正しく申告、納税することで財源を確保することが必要なのである。

税はもともと国民の財布から出たお金とシンプルに考えてみる。所得税や消費税を通じ、巡り巡って誰かの医療費の一部となる。医療や介護、障害者福祉のニーズは生きている限り常に存在する。それらを自己責任で満たしていく社会は非現実的だ。ゆえに皆で税を出し合い、誰もが不安から自由になれる社会を保証すべきである。中学生の私が参画できるのは消費税だ。公平な税制ではないなど批判も多い税だが、消費に伴い支払われることが前提だからこそ、私達は本当に必要なものと無駄なものを選ぶことができると思う。すなわち消費税を支払うことは私達中学生ができる未来への選択行動である。税は受け身的に支払われるものではなく、むしろ能動的に支払うものという意識を持つこと。それが自分達が社会の一員であるという自覚を養うことにもなるだろう。

お金は人の意識を引きつけ、気持ちも行動も変える力がある。痛みを分かち合い社会と生きる仲間達の幸福を支えるプロセスが民主主義なら、私達は税の話から目を逸らさずに、実現可能なるべき社会の姿を語り合うべきだ。税の使い道を知り、自分達が決定する喜びを味わうこと。納税とは無償の愛の表現と私は思う。将来私は自分が受けた社会保障の恩恵を、納税という形で還元する目標がある。その責任を果たすために病気とうまく付き合い、税についての学びを深めていきたい。